

國學院大學學術情報リポジトリ

Aspects of the Text of The Tale of Genji in the Library of Congress : Focusing on the Wakamurasaki Volume

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Sugawara, Ikuko メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000388

米国議会図書館所蔵『源氏物語』の本文の様相

— 若紫巻を中心に —

菅原郁子

一、はじめに

本稿では、米国議会図書館 (Library of Congress) 所蔵『源氏物語』(以下、「米国議会図書館本」とする) について考察する。

米国議会図書館本¹⁾ (LC control No.2008427768) とは、米国議会図書館アジア部日本課 (Library of Congress, Japanese Rare Book Collection) に二〇〇八年より所蔵となった『源氏物語』の写本のことである。全五十四帖揃、縦二五〇二五・二厘、

横十六・八〇七七厘、列帖装 (綴葉装)、料紙は鳥の子、題簽は柿洪色、表紙は濃青色、後補改装かと思われ、前蓋に「源氏全部五十五冊／五辻殿諸御筆／外題三条西殿実隆御筆」と金字された黒塗箱に収められ、古筆了仲 (二六五六〜一七三六) の折紙が添えられている。了仲の折紙の記載によれば、本文は五辻諸仲 (一四八七〜一五四〇)、外題は三条西実隆 (一四五五〜一五三七) の手によるものである。ゆえに、書写年代は米国議会図書館蔵書目録において、実隆没年の一五三七年以前とされている²⁾。

米国議会図書館本については、和歌の特殊表記 (散らし書き・

分(か)ち書(か)き)に注目されたもの^③、書写態度について指摘されたもの^④、仮名の字母表記の偏りと揺れについて論じられたもの^⑤、などの先行研究がある。こうした研究成果をふまえて、米国議会図書館本の伝来や素姓についてはすでに考察を行っている^⑥。そこで本稿では、米国議会図書館本の素性や伝来について再確認し、冒頭の桐壺巻の実態をふまえつつ、さらに若紫巻の本文の様相を探ってみた。

二、米国議会図書館本の素性と伝来

まず、米国議会図書館本の素性と伝来について再確認しておく。米国議会図書館本に添えられた古筆了仲の折紙には、「源氏物語四半本 全／五辻殿諸仲脚真筆／外題三條西殿実隆公／御一筆無疑者也／五月下旬 了仲正徳元年 古筆 鈞玄 (陽刻朱印)」とある。つまり了仲は、この『源氏物語』は五辻諸仲の真筆であり、外題は三條西実隆によるものに相違ない旨を正徳元年(一七一)五月下旬に記している。了仲は天保七年(一八三六)版『古筆了伴大人閱和漢書画古筆鑑定家系譜並印章』^⑦によれば古筆別家の三代目であり、「鈞玄斎」という印章を折紙に用いていた。了仲の折紙に登場する米国議会図書館本の書写者とされる五

辻諸仲^⑧は天文七年(一五三八)十二月二七日に従三位に叙せられて堂上家に加わっている。明応九年(一五〇〇)の拜賀の記録を記した『諸仲藏人奏慶記』^⑨などがあり、また『日本書流全史』^⑩によれば、実隆を祖とする三條殿流(逍遙院流)に諸仲の名が見える。『実隆公記』^⑪永正五年(一五〇八)九月七日程には、諸仲が五枚の三十六歌仙の画の色紙に歌を書いてほしいと所望し、色紙を預け置いた、という記述も見えることから、諸仲は和歌や書を通して、米国議会図書館本の折紙に見える三條西家と関わりのあった人物であることが確認できる。

拙稿^⑫でも指摘したが、諸仲が書写したとされる『源氏物語』について、渡部榮氏の著書である『源氏物語従一位麗子本之研究』^⑬に興味深い記述が見える。渡部榮氏(一九一三—一九九二)は国文学者、古文学書学者であり、北小路健という名で執筆活動も行っていた人物である。東京文理科大学国文科を卒業、玉井幸助氏、山岸徳平氏らに師事し、後に本文研究の末、京極北政所(従一位麗子)の書写した「従一位麗子本(渡部氏は著書の中で「じゅいちいよしこほん」とルビを付す)」の系統を伝える本文、いわゆる転写本を所持していた人物である。渡部氏の『源氏物語』の本文研究の主軸となった従一位麗子本とは、平安時代末期に源麗子が書写したとされる『源氏物語』

の古写本のことである。源麗子は村上天皇の子具平親王の孫で、源師房と藤原道長の五女尊子との娘であり、藤原師実の妻となつた人物である。従一位麗子本は、「麗子本」や「京極北政所本」とも呼ばれ、その存在は、『河海抄』に内容についての言及があり、鎌倉末期に河内守であつた源光行・親行の親子によつて作成された河内本の基となつた本文の一つであるとされているものである。この転写本と見られる写本が昭和初期になつて出現したものと考えられる。

興味深いのは渡部氏が指摘するこの麗子本を調査するにあたり、渡部氏は麗子本に対校した本文について、

此所までの部分に就いては殆ど必要は無かつたのであるが、此の後の部分の論述に対して、かなり重要な資料を提示する一本を紹介し、以下考察の便宜上本文を併記する事とする。此の本は縦八寸四分、横五寸六分、青色の表紙に正中に朱色の題簽を押し、鳥子紙の粘葉装で、五十四冊一筆本である。一丁平均十行書きの部分が最も多く、十一行の部分も多少存する。知人の仲介を得て借覧し校合研究の機をあたへられたものであつて、現在東京市居住の某氏の珍藏される所である。奥書が存しないので、確実には誰の

手に依つて書写され、如何なる系統の親本に依つて転写されたものかは明かにしがたいが、次の如き古筆の極め札が附されてゐる。

源氏物語四半本全五辻殿諸仲卿真筆外題三條西殿実隆公御

筆無疑者也

正徳元年

五月下旬

古筆
了 仲

印

と記していることである。つまり、麗子本と対校した本文には「源氏物語四半本全五辻殿諸仲卿真筆外題三條西殿実隆公御筆無疑者也」という極札の付いた五辻諸仲卿の真筆本（以下、「諸仲本」とする）を用いたというのである。これは先ほど述べた米国議会図書館本の古筆了仲の折紙の記述と全く一致するのである。つまり、渡部氏が見た諸仲本に添えられていた折紙と、米国議会図書館本の折紙とは同一のものと考えられる。さらに諸仲本について、渡部氏の指摘する「縦八寸四分、横五寸六分」「青色の表紙に正中に朱色の題簽を押し、鳥子紙の粘葉装で、五十四冊一筆本である。」は、「粘葉装」という記述以外は米国議会図書館本の書誌形態とほぼ一致している。

そこで拙稿では、渡部氏が見ていた諸仲本と現存する米国議

会図書館本は同一のものだろうという可能性を示唆した。そこでさらに、この可能性をより強固なものにするために、諸仲本文と米国議会図書館本の本文の具体的な近似性について述べておきたい。

三、米国議会図書館本桐壺巻の本文

米国議会図書館本は、書誌概要、折紙の一致などから考えると、諸仲本と同一の本文である可能性が高い。そこで、さらにLC本の本文の実態について考察してみた。

諸仲本は現在、渡部氏の『源氏物語従一位麗子本之研究』に掲載の翻刻活字本文においてしか確認することができない本文である。桐壺巻において、渡部氏は麗子本に近いと思われる諸仲本の本文箇所を任意に選び取り、麗子本、諸仲本、河内本(尾州家本)の活字翻刻を上・中・下段の三段に併記し、気になる箇所には青表紙本の翻刻本文(『湖月抄』)を添えている。渡部氏は、「桐壺の巻において使用した諸仲本に就いては所蔵者の都合により、現在、此れ以上詳細に他の部分にも亘つて比較説明する自由を與へられて居らない。併し全部の校合、調査は既に終了して居るので、近く第二の手続として、諸仲本の全貌を

明らかにしたい」と述べてはいるものの、桐壺巻しか本文比較を行っていない。つまり、諸仲本は五十四帖の全てにおいて本文を比較することは出来ず、桐壺巻の翻刻本文の抜粋のみが存在していることになる。

そこで、桐壺巻の抜粋箇所の諸仲本【諸仲】と米国議会図書館本【LC】、麗子本【麗子】とを比較し、さらに現存する『源氏物語』の古写本二十八本¹⁷⁾とを対校したところ、諸仲本と米国議会図書館本には両者にしか見られない独自の共通異文三十五例、諸仲本と米国議会図書館本、麗子本に見られる共通異文十九例のあることが判明した。諸仲本と米国議会図書館本が極めて近い本文であり、いかに他の『源氏物語』諸写本と孤立した共通異文を持っているかということを確認するために、両者にしか見られない独自の共通異文三十五例の中から、九例を以下に抽出した。例示する際には、『源氏物語』諸写本の中から、『源氏物語大成』桐壺巻の底本である池田本(池)の表記、さらに【LC】【諸仲】に近い表記を持つ写本がある場合には比較対象として掲げた。

①【LC】さしかためて心をあはせて(三丁ウラ五行目↓
以下「三ウ五」と略す)

- 【諸仲】さしかためて心をあはせて
(池) さしこめこなたかなた心をあはせて
- ②【LC】うへの御心はへを (十ウ六)
- 【諸仲】うへの御心はへを
- (池) かしこき御心さしを
- ③【LC】ていしのみかと (十二オ六)
- 【諸仲】亭子のみかと
- (池) 亭子院の
- ④【LC】うたをも我御世のみ (十二オ七)
- 【諸仲】うたをも我御世のみ
- (池) うたをも
- ⑤【LC】かくもんをせさせたまつり (十七ウ八)
- 【諸仲】かくもんをせさせたまつり
- (池) 〈当該なし〉
- 【麗子】「かくもんをさせたまへり」
- (陽) (仏) 「御かくもんをせさせたまつり」
- ⑥【LC】みやすところもいときりつほの更衣の (十八ウ八)
- 【諸仲】みやすところもいときりつほの更衣の
- (池) きりつほのかういの
- ⑦【LC】か、やく日のみこと (二〇ウ四)

【諸仲】か、やく日のみこと
(池) か、やく日の宮と

⑧【LC】人々いみしかる (二二ウ九)

【諸仲】人々いみしかる
(池) 〈当該なし〉

【麗子】人のいみしかる

⑨【LC】こ、ら見るに人なくも (二四オ二)

【諸仲】こ、ら見るに人なくも
(池) みる人なくも

例えば、③「ていしのみかと (十二オ六)」では、(池) では、「亭子院の」とある。「院」を「みかと」とするのは【LC】【諸仲】のみであり、その他の写本には見られない。また、④の箇所について渡部氏は「諸仲本ノ「我御世のみ」ノ一句ハ前後ノ関係ヨリシテ、不穩当ナ存在デアルト思ハレル」と述べており、文意としては成立しないという。しかし、誤字であるとしても、「我御世のみ」は他の諸本には見られない表現であるということとは明白である。つまり、【LC】【諸仲】の近似性を裏付けるものとしては、「我御世のみ」という語句は確かな表現の一つであるといえる。⑤の【LC】「かくもんをせさせたまつり」

では、(池)は当該する本文がなく、近いのは【麗子】「かくもんをさせたまへり」や、陽明文庫本(陽)・伝阿仏尼筆本(仏)が「御かくもんをせさせたてまつり」である。⑥は【LC】「みやすところもいとぎりつほの更衣の」では、(池)では「きりつほのかういの」とあり、明示していないが、【麗子】は「きりつほの更衣の」、(仏) (陽)は「きりつほのみやす所も」となっている。この箇所について渡部氏は、【諸仲】は妥当性を欠くと指摘し、別系統の本文をもって校合傍書したものを転写の際に混入させてしまったものか、または見せ消ちの部分を本行本文として書いてしまったものかと述べ、前者の指摘を採択している。いずれにせよ、「みやすところもいとぎりつほの更衣の」という表現は【LC】と【諸仲】以外の他本には見当たらない。

【LC】【諸仲】が極めて近い本文であるということの証明はなるのである。また、

⑩【LC】女君いみしと (五ウ一)

【諸仲】女いみしと

(池) 女^{いみしと}もいと

⑪【LC】すくよこの (十八オ二)

【諸仲】すくえうの

(池) すくえうの

【LC】の独自異文二例(⑩⑪)があり、一見ともによく似ている表記の写し間違いのようにも思える。だが、誤写であるとしても、【LC】には前掲の⑦のように(池)「かかやく日の宮」を「か、やく日のみこ」とするなど、呼称についての独自の表現を有しているため、⑩の「女君」というのもあながち誤写であると断定できないところがある。もともとこのような本文であった可能性も考えられる。

さらに興味深いのは前述したように、米国議会図書館本や諸仲本の共通異文に、一番近い本文が麗子本であるということである。米国議会図書館本・諸仲本・麗子本の共通異文は全部で十九例あり、

⑫【LC】きよけなる (二オ四)

【諸仲】(翻刻活字がないため、不明)

【麗子】きよけなる

(池) きよらなる

⑬【LC】ゑにかきとめたるやうきひ (十三オ八)

【諸仲】絵にかきとめたる楊貴妃

【麗子】絵にかきとめたる楊貴妃

(池) 絵にかける楊きひ

⑭【LC】春宮の御は、女御の(十八ウ七)

【諸仲】春宮の御母女御の

【麗子】春宮の御母女御の

(池) 春宮の女御の

中でも特に⑫「きよけ(諸仲本は不明)」、⑬「かきとめたる」
⑭「御は、女御」などは、『源氏物語』の物語内容にも関わる
本文校異であり、その箇所が共通しているのは大変興味深い。
さらに、これらの【LC】【諸仲】【麗子】の本文は、対校本文
二十八本の中では、陽明文庫本、伝阿仏尼筆本、国冬本などと
近い傾向の本文をも有していると考えられる。

四、米国議会図書館本若紫巻の本文

こうした米国議会図書館本桐壺巻の考察結果をふまえて、若
紫巻の本文について言及する。

米国議会図書館本の若紫巻には欠落した本文部分がある。

①光源氏が紫の上を垣間見した直後の尼君と僧都の場面

「あないみじや。いとあやしきさまを人や見つらむ」と
て簾おろしつ。：(中略)：「：かやうなる人の験あら
はさぬ時、はしたなかるべきも、ただなるよりはいとほ
しう思ひたまへつつみてなむ、いたう忍びはべりつる。
いまそなたにも」とのたまへり。すなはち僧都(二〇九
〜二一〇頁)^⑬

②光源氏が紫の上の素姓を知る場面

見まほし。人のほどもあてにをかしう、なかなかのさか
しら心なく、(二二三頁)

③光源氏が紫の上を僧都に所望する場面

それにつけてもの思ひのよほしになむ、齢の末に思ひ
たまへ嘆きはべるめる」と聞こえたまふ。さればよ、と
思さる。：(中略)：内にも人の寝ぬけはひしるくて、
いと忍びたれど、数珠の脇息にひき鳴らさるる音ほの聞
こえ、なつかしううちそよめく音なひ(二二三〜二二五
頁)

④藤壺と光源氏の逢瀬の場面

たまはざりけむと、つらうさへぞ思さるる。何ごとをか
は聞こえつくし(二三一頁)

⑤ 藤壺の懷妊、懊惱する場面

御湯殿などにも親しう仕うまつりて、何ごとの御気色をもしるく見たてまつり知れる御乳母子の弁、命婦などぞ、あやしと思へど、：(中略)：はかなき一行の御返りのたまさかなりしも絶えはてにたり。七月になりてぞ参りたまひける。めづらしうあはれにて、いとどしき御思ひのほど限りなし。すこしふくらかになりたまひて、うちなやみ面瘦せたまへる、(二三三～三三四頁)

⑥ 尼君が光源氏に紫の上を託す場面

かならず数まへさせたまへ。いみじう(二三七頁)

⑦ 紫の上の容貌を描く場面1

見しよりも、いみじうきよらにて、なつかしううち語らひつつ、をかしき絵、(二五七頁)

⑧ 紫の上の容貌を描く場面2

うち萎えたるどもを着て、何心なくうち笑みなどしてゐたまへるが(二五七～二五八頁)

⑨ 光源氏と馴れむつぶ紫の上の場面

きこえたまはず。もとより見ならひ(二六一頁)

以上のように、光源氏が若紫を垣間見し僧都に打診する様子

や、藤壺と光源氏の禁忌の逢瀬や懊惱する藤壺の場面、紫の上が二条院にやってきた後の光源氏の描写場面などが米国議会図書館本の若紫巻では欠落している。これらの欠落した本文以外の部分を、現存する『源氏物語』古写本十七本の本文と対校したところ、若紫巻は凡そ大島本に近い本文であると考えられる。例えば、

①【LC】人申す君もかゝる旅ねもならひたまはねはさす
かにおかしくてさらは(四〇七)

(大) 申す君もかゝるたひねもならひたまはねはさすか
におかしくてさらは

(尾) 人々もきこゆればさらは

②【LC】あか月にとのたまふ人なくて(四〇八)

(大) あか月にとの給ふ人なくて

(尾) あか月にとてとまらせ給かゝるたひねもならはぬ
御こ、ちにおかしくおほされぬへかりけりひも

③【LC】これみつのあそんとのそき給へは(四〇九)

(大) これみつのあそむとのそき給へは

(尾) これみつばかり御ともにてのそきたまへは

①のように、【LC】「人申す君もかゝる旅ねもならひたまはねはさすがにおかしくてさらは」の箇所は、尾州家本(尾)「人々もきこゆればさらは」とは全く異なり、大島本(大)「申す君もかゝるたひねもならひたまはねはさすがにおかしくてさらは」と一致する。同様に、②【LC】「あか月にとのたまふ人なくて」も(尾)「あか月にとてとまらせ給かゝるたひねもならはぬ御こゝちにおかしくおほされぬへかりけりひも」とは異なり、(大)「あか月にとの給ふ人なくて」と一致している。③【LC】「これみつのあそん」も、(尾)「これみつはかり」とは一致せず、やはり(大)「これみつのあそむ」と一致している。すなわち、米國議會図書館本の若紫巻は大島本に近似しているといえよう。さらに、大島本と共通しない異文箇所七十五例を見てみると、池田本三十五例、御物本三十四例、三条西家本三十三例、肖柏本二十七例と一致する。

そこで、右記以外の他の本文とも比較してみると、前述の大島本と共通しない異文箇所七十五例にはこの他、

〈河内本系統の本文との比較〉

①【LC】ことさらに(十八オ四)

(尾)(高)(天)(橋)こと(事)さらに

(陽)(中)(麦)(阿)ことさらに
(大)ことさら

②【LC】山里にも(十八ウ四)

(尾)(高)(天)(橋)山さとにも

(陽)(中)山さと(里)にも

(大)山さと人にも

〈天理河内本としか共通しない二例〉

①【LC】たてまつりける(十ウ二)

(天)たてまつりける

(大)たまへりける

②【LC】たゆふをそ(二三ウ六)

(天)たゆふをそ

(大)たいふをそ

〈麦生本・阿里莫本としか共通しない五例〉

①【LC】聞ゆる程に(六オ一)

(麦)(阿)聞ゆるほどに

(大)きこゆると

(池)きこゆるほど

②【LC】かよひたる(十八ウ二)

(麦)(阿)かよひたる

(大) かよひける

③【LC】するにけそうなれは(二六ウ三)

(麦) (阿) するにけそうなれは

(大) するに

④【LC】給ふやかて手ほんにとおほすにや(二七オ九)

(麦) (阿) 給やかてて本にとおほすにや

(大) 給やかててほむにとおほすにや

⑤【LC】ふくらかに(二八オ二)

(麦) (阿) ふくらかに

(大) ふくよかに

尾州家本(尾)、高松宮本(高)、天理河内本(天)、橋本本(橋)などに共通する表記も見え、用例は少ないものの、天理河内本としか共通しない本文表記①「たてまつりける」②「たゆふをそ」などもあり、いわゆる青表紙本系統の本文だけではなく、河内本系統の本文の影響も垣間見える。さらに麦生本(麦)や阿里莫本(阿)としか共通しない表記もあり、一字違いの差ではあるものの、①「聞こゆる程に」の「に」、②「かよひたる」の「たる」、③「するにけそうなれは」の「けそうなれは」、④「給ふやかて手ほんにとおほすにや」の「やかて手ほんに」、⑤

「ふくらかに」の「ら」、などが見られた。

また、若紫巻における異文の可能性のある一三二例を分析すると、独自異文のうち、一字や二字程度の誤字や脱字の例(A)、三字以上異なる例(B)などが合わせて一二〇例近くあり、その他、全く表記内容が異なる十二例(C)が見られた。

A 一字や二字程度の誤字や脱字の例(一〇四例)

①【LC】おこり(二オ二)

(大) お(を)こりて

(中) 心ちにて

②【LC】ひとり(二ウ二)

(大) ひしり

(尾) ひしりは

③【LC】打ゑつ、(二ウ五)

(大) (尾) うちゑみつ、

(中) うちゑみて

④【LC】にほひやかなる(二ウ六)

(大) ゆほひかなる

(尾) (中) (阿) ゆほひかなる

(橋) ゆほひかなる

B 三文字以上異なる例(十六例)

①【LC】いかてかかうしも(一ウ四)

(大) いかてかう

(尾) (高) (天) いかてか、く

(池) (三) (穂) (伏) (国) (麦) (阿) いかてかかう

(橋) いかてか、う

②【LC】れいの中に御はなちかきなん(十四オ四)

(大) れいの中にかの御はなちかきなん

(尾) た、そのはなちかきなん

③【LC】おほしみたる程は(十六オ一)

(大) おほしみたるあつきほとは

(尾) おほしみたる、ことまさりぬあつきほとは

④【LC】夕くれなとこそ(二九オ一)

(大) (麦) (阿) ゆふくれなとはかりそ↓他全て

(尾) (高) (天) (中) (橋) ゆふくれなとそ

C 全く表記内容が異なる例(十二例)

①【LC】わかき女(二オ五)

(大) わかき人↓他全て

(尾) (高) (天) わかき人とも

(中) わかき人々も

(橋) わかき人など非

*直前に「おかしけなる女ことも」とあり、それが表記上で混同したか。

②【LC】こと、のたまう(四オ三)

(大) (池) 事このみ給

(尾) ことをこのみたまふ

③【LC】明暮心にかけ聞ゆる(五ウ二)

(大) かきりなう心をつくしきこゆる↓他全て

(尾) かきりなくこ、ろつくしきこゆる

④【LC】あてなるに立いてんこと葉つかひも(七ウ九)

(大) あてなるにうちいてむこはつかひも

(尾) おかしけなるにうちいてんこはつかひも

(中) おかしけなるにうちいてんこわつきも

⑤【LC】山水にとまり侍ぬれと(十オ三)

(大) 山水に心とまり侍りぬれと

(尾) 山みつにこ、ろもとまりはへりぬれと

⑥【LC】聖徳太子のくたらいふ国よりたてまつりける(十ウ二)

(大) (尾) さうとくたいしのくたらいふ国よりたてまつりける

(天) さうとくたいしのくたらいふ国よりたてまつりける

(中) さうとくたいしのくたらいふ国よりたてまつりける

- ⑦【LC】ことなる君いといたう打なやみて(十一ウ二)
 (大) ことなるきみたちを源氏の君いといたううちなやみて
 ちなやみて
 (尾) きよけなるきむたちなるを源しのきみのいたくうちなやみて
 ⑧【LC】御もてなしをおほしなほる(十三オ六)
 (大) 御もてなしをもしおほしなおる
 (尾) 御もてなしをすこしよろしうおほしなる
 ⑨【LC】おほしみたる程は(十六オ一)
 (大) おほしみたるあつきほとは
 (尾) おほしみたる、ことまさりぬあつきほとは
 (麦) (阿) おもほしみたるあつきほとは
 ⑩【LC】見給へをくなん(十七オ九)
 (大) みたまへをくなんねかひ侍る
 (尾) 見をきはへるなんねかひはへる
 ⑪【LC】筆打をきつ、すまゐ(二一ウ八)
 (大) ふてうちをきつ、すさひゐ
 (尾) ふてうちおきつ、すさみゐ
 ⑫【LC】ひき入させてたゆ(二四ウ六)
 (大) ひき入させてたいふ

(尾) ひきいれてほしいたいふ

Cの②④⑫などには比較的一字の誤字や脱字の傾向も見られる。しかし、Cの①では、他の写本は全て「わかき人」となっている箇所が米国議会図書館本【LC】では「わかき女」とあり、一字の違いではあるものの誤写とは捉えにくい。また、Cの③では、明らかに表記が全く異なっている。諸写本が「かきりなうへく」となっている箇所を【LC】は漢字表記で「明暮」とあり、意味が通る異文であるため、こうした本文がある可能性を感じさせる。さらには、Cの⑦では諸写本が「きみたちを源氏の君」となっている箇所を【LC】では「君」のみにしていたり、Cの⑩では諸写本が「ねかひ侍る」となっている箇所を【LC】ではその表記全体が欠落している。つまり、誤字や脱字とは言い切れず、こうした表記の有無を持つ本文の存在が【LC】の若紫巻の本文からは窺えるのである。

五、おわりに

以上、米国議会図書館本の書誌について五辻諸仲本との近似性を再確認し、桐壺巻の本文比較方法をふまえて、若紫巻の本

文の実態について考察した。

米國議會図書館本は、昭和初期、渡部榮氏が見て以来行方不明であった五辻諸伸真筆本そのものであり、従一位麗子本との関係で『源氏物語』研究史上に姿を現した伝本が、約八十年の歳月を経て、その存在が再び明らかになったものである。

そこで、他の『源氏物語』諸写本と本文比較を行った結果、桐壺巻の本文は、大島本や三条西家本などの本文に近い別本であり、従一位麗子本を含めた河内本の素養もあり、かつ、陽明文庫本・伝阿仏尼筆本・慈鎮本・飯島本・国冬本に近い別本と考えられる。

また、若紫巻の本文は、桐壺巻と同様に、大島本や三条西家本などの本文に近い別本であり、河内本の素養もあるものの、陽明文庫本や国冬本よりも麦生本や阿里莫本に近い別本と考えられる。

若紫巻の本文には桐壺巻で共通する傾向の多かった従一位麗子本、伝阿仏尼筆本^②、慈鎮本などが完本としていたために全体を対校することができない。しかし、今後、米國議會図書館本の他の巻の本文の検証を進めていくことで、諸写本と米國議會図書館本との相関性や、米國議會図書館本の本文全体の実態も明らかになるといえよう。

注

- (1) 国立国語研究所共同研究プロジェクト「仮名写本による文字表記の史的研究（代表者：斎藤達哉氏）、人間文化研究機構の人間文化研究連携共同推進事業・平成二十二年度「海外に移出した仮名写本の緊急調査」・平成二十三年度「海外に移出した仮名写本の緊急調査（第二期）」（代表者：高田智和氏）。米國議會図書館における原本の予備調査（二〇一〇年）、詳細調査（二〇一一年・二〇一二年）のうち、二〇一〇年、二〇一一年の調査メンバーの一人として同行させて戴いた。二〇一二年一月には全巻の翻刻作業が終了し、左記の国立国語研究所HPからテキストが公開されている（国立国語研究所「米國議會図書館蔵『源氏物語』翻字本文（<http://textdb01.ninjal.ac.jp/LCgenji/>）。また、原本画像は桐壺・須磨・柏木巻の三巻を米國議會図書館アジア部が公開している（<http://leweb4.loc.gov/service/asia/asia0001/2012/2012html/201220084276800loc.html>）。
- (2) 斎藤達哉氏・高田智和氏編『米國議會図書館蔵『源氏物語』翻刻―桐壺―藤裏葉―』（国立国語研究所、二〇一一年三月）。伊藤鉄也氏「米國議會図書館アジア部日本課蔵『源氏物語』の調査概要」（斎藤達哉氏・高田智和氏編『米國議會図書館蔵『源氏物語』翻刻―桐壺―藤裏葉―』（国立国語研究所、二〇一一年三月）。高田智和氏・斎藤達哉氏「米國議會図書館蔵『源氏物語』について―書誌と表記の特徴―」（国立国語研究所論集）第六号、二〇一三年十一月）。
- (3) 豊島秀範氏「アメリカ議会図書館本の和歌表記の特徴―和歌の一行散らし書きを中心に―」（『國學院大學大学院平安文学研究』第二号、二〇一〇年九月）。
- (4) 神田久義氏「米國議會図書館本『源氏物語』の書写形態に関する一試論」（豊島秀範氏編『源氏物語本文の研究』國學院大學文学部日本文学科、二〇一一年）。

- (5) 斎藤達哉氏「語の表記における仮名字体の「偏り」と「揺れ」―米國議會図書館蔵源氏物語写本の「ケハヒ」と「カタハライクシ」の表記」(小山利彦氏編著『王朝文学を彩る軌跡』武蔵野書院、二〇一四年)。
- (6) 拙稿「米國議會図書館蔵『源氏物語』の本文―麗子本対校五辻諸仲筆本の出現―」(拙著『源氏物語の伝来と享受の研究』武蔵野書院、二〇一六年)。
- (7) 森繁夫氏「古筆鑑定と極印」(臨川書店、一九八五年復刻版) 所収「古筆了伴大人閔和漢書画古筆鑑定家系譜並印章」に拠る。
- (8) 『尊卑分録』第三編(『新訂増補国史大系』第六〇巻上、吉川弘文館、二〇〇一年、四〇三頁)、「公卿補任」第三篇(『新訂増補国史大系』五五巻、吉川弘文館、二〇〇一年新装版、三九八頁)、「増補諸家知譜拙記」五ノ五(統群書類従完成会、一九七七年、一九七頁)、「顕伝明名録」上・巻第二・五一(日本古典全集刊行会、一九三八年、八六頁)、「諸家伝」十・五辻(日本古典全集刊行会、一九三九年、八〇〇頁)等参照。
- (9) 『諸仲藏人奏慶記』(『統群書類従』第十一輯下・公事部装束部、巻第三〇一・公事部、統群書類従完成会、一九五七年、七〇五―七一〇頁)。
- (10) 『逍遙院流』の項目「諸仲 五辻殿」(小松茂美氏蔵『明翰鈔』巻二十九・所収『流儀集』)、『逍遙院流』の項目「緒(語) 仲 五辻」(静嘉堂文庫蔵『古筆流儀分』一冊)、『小松茂美著作集第十六巻 日本書流全史二』旺文社、一九九九年、三七五・四〇七頁)。
- (11) 『実隆公記』巻五上(『統群書類従完成会』一九六三年、九三頁)。
- (12) 注(6)の拙稿に同じ。以下の引用も全て同じ。
- (13) 渡部榮氏『源氏物語従一位麗子本之研究』(大道社、一九三六年。復刻版として、日向一雅氏監修解題『源氏物語研究叢書 第六巻 源氏物語従一位麗子本之研究』(クレス出版、一九九七年)がある)。
- (14) 北小路健(渡部榮)氏『古文書の面白さ』(新潮社、一九八四年、二二―二四頁、三〇―三一頁)を参照。著書『古文書の面白さ』によれば、渡部榮氏は福島県生まれ、東京文理科大学国文科を卒業、教壇生活等を経て、玉井幸助氏、能登朝次氏、山岸徳平氏らに師事し、『源氏物語』の研究を行う。主な著作として、『源氏物語従一位麗子本之研究』その他、『源氏物語律調論』(文学社、一九四〇年)、『遊女 その歴史と哀歌』(人物往来社、一九六四年)、『木曾路 文獻の旅―夜明け前―探究』(芸艸堂、一九七〇年)等がある。
- (15) 池田利夫氏『源氏物語の古写本』(別冊國文學『源氏物語事典』特装版、学燈社、一九九三年六月、三六〇―三六六頁)。
- (16) 注(13)に同じ。以下、引用本文は全て同じ。
- (17) 比較対象とした写本の出典は以下の通りである。
- ・(池) 池田本 天理大学附属図書館蔵『源氏物語』(請求記号：九一・三三六/イ九五) 紙焼写真
 - ・(肖) 肖柏本、(国) 国冬本、(麦) 麦生本、(阿) 阿里莫本 『源氏物語別本集成』第一巻(桜楓社、一九八九年)、『源氏物語別本集成 続』第一巻(おうふう、二〇〇五年)
 - ・(三) 日大三条西家本 『日本大学蔵 源氏物語』第一巻(八木書店、一九九四年)
 - ・(書) 書陵部三条西家本 『宮内庁書陵部蔵青表紙本 源氏物語』第一冊(新典社、一九六八年)
 - ・(大) 大島本 『大島本 源氏物語』第一巻(角川書店、一九九六年)
 - ・(明) 明融本 『源氏物語 明融本』第一巻(東海大学出版会、一九九〇年)
 - ・(伏) 伏見天皇本 『伏見天皇本影印 源氏物語』第一冊(古典文庫、一九九一年)
 - ・(穂) 穂久邇文庫本 『日本古典文学影印叢刊三 源氏物語』第一巻(貴重本刊行会、一九七九年)

- ・(保) 保坂本 『源氏物語』 第二卷(おうふう、一九九五年)
 - ・(飯) 飯島本 『源氏物語』 第一卷(笠間書院、二〇〇八年)
 - ・(国徹) 人間文化研究機構・国文学研究資料館所蔵『源氏物語』(請求記号: サ四/七五/一)
 - ・(京徹) 京都女子大学図書館吉澤文庫蔵『きりつほ』(請求記号: 吉澤文庫/YK/九二・三六/M)のマイクロ(国文学研究資料館所蔵、請求記号: 二四二/七二/七)の紙焼写真
 - ・(慶徹) 慶應義塾図書館所蔵『源氏物語』(請求記号: 一三二X/一五八/一)
 - ・(書徹) 宮内庁書陵部蔵『源氏物語』(請求記号: 五五四/一四、複四〇三三)
 - ・(為秀) 専修大学図書館所蔵『源氏物語』(伝冷泉為秀筆本(請求記号: A/九二・三三/MU五六))
 - ・(孝親) 専修大学図書館所蔵『源氏物語』(伝中山孝親筆(請求記号: A/九二・三三/MU五六))
 - ・(高) 高松宮本 『高松宮御蔵河内本 源氏物語』 第一卷(臨川書店、一九七三年)
 - ・(尾) 尾州家本 『尾州家河内本 源氏物語』 第一卷(八木書店、二〇一〇年)
 - ・(平) 平瀬本 文化庁蔵『源氏物語』 紙焼写真
 - ・(御) 御物本 『御物 各筆源氏』 第一冊 貴重本刊行会、一九八六年)
 - ・(陽) 陽明文庫本 『陽明叢書国書篇 源氏物語』 第一卷(思文閣出版、一九七九年)
 - ・(大正) 大正大本 大正大学附属図書館蔵「貴重書画像公開 源氏物語写本」の電子データに拠る。
 - ・(絵) 絵入源氏 専修大学図書館蔵『絵入源氏物語』承応三年版(請求記号: A/九二・三三/MU五六)
 - ・(九六) 九大古活字本 九州大学附属図書館蔵「九大コレクション貴重資料画像」『源氏物語』古活字本の電子データに拠る。(http://catalog.lib.kyushu-u.ac.jp/ja/search/browse/rare)
 - ・(湖月) 湖月抄 専修大学図書館蔵『湖月抄』(請求記号: A/九二・三三/Ki六八)
 - ・(首書) 首書源氏 『首書源氏物語』 第一卷(和泉書院、一九八〇年)、『首書源氏物語本文』上巻(東京図書出版、一九四四年)
 - ・(仏) (慈) 伊藤欽也氏「桐壺」の第二次的本文資料集成—伝阿仏尼筆本・伝慈鎮筆本・従一位麗子本・源氏釈抄本—(『源氏物語本文の研究』おうふう、二〇〇二年)の翻刻活字資料(伝阿仏尼筆本、室伏信助氏校合本)に拠る。
- (18) 新編日本古典文学全集『源氏物語』一(小学館、一九九四年)。以下の引用本文は全て同じ。
- (19) 注(17)の写本のうち、大島本、日大三条西家本、肖柏本、池田本、穂久邇文庫本、高松宮本、尾州家本、伏見天皇本、保坂本、陽明文庫本、国冬本、麦生本、阿里莫本を対校本文とし、中山本、天理河内本、橋本本を加えて、計十七本を若紫巻の対校本文とした。
- ・(中) 中山本 『源氏物語別本集成』 第二巻(桜楓社、一九八九年)
 - ・(天) 天理河内本 『源氏物語別本集成続』 第二巻(おうふう、二〇〇五年)
 - ・(橋) 橋本本 『源氏物語別本集成続』 第二巻(おうふう、二〇〇五年)、『国文学研究資料館蔵 橋本本『源氏物語』「若紫巻」』(新典社、二〇一六年)
- (20) 注(13)には麗子本、島津久基氏『對譯 源氏物語講話』(中興館、一九三〇年)には麗子本と伝阿仏尼筆本(旧紀州家本)についての本文校異が部分的に見られる。しかし、若紫巻において、麗子本も旧紀

州家本も一部分の本文校異しか確認することができない。本稿で取り上げた大島本と共通しない異文七十五例の本文に該当する部分はなく、検証することができなかった。

〔付記〕

本稿は平成二十九年(一九九六年)度國學院大學國文學會秋季大会(於國學院大學・二〇一七年十一月十九日)における口頭発表を基に加筆修正したものです。席上、ご教示を賜りました諸先生方に深謝申し上げます。

また、LC本の原本閲覧・調査にあたり、お世話になりました米国議会図書館の各位にも感謝申し上げます。